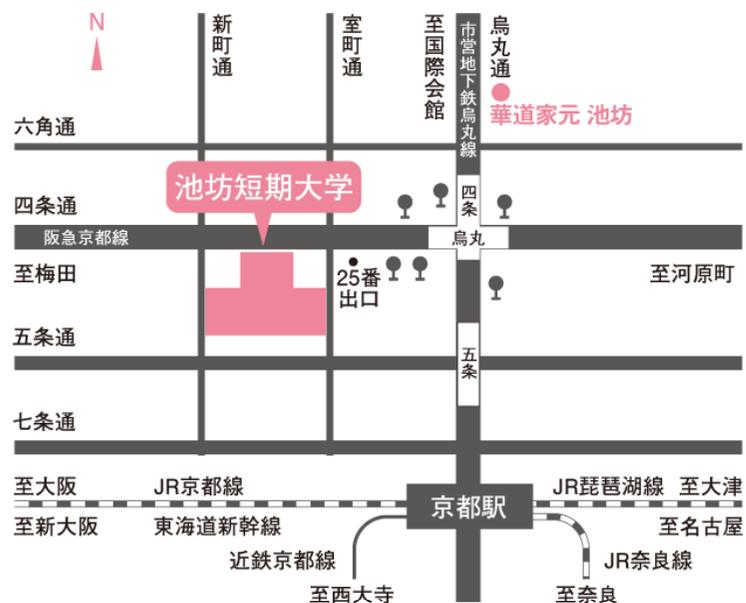


交通アクセス



JR をご利用の方

- ・ JR「京都駅」より（地下鉄乗車時間 4分）
- ・ 地下鉄烏丸線「国際会館」行き乗車 → 「四条駅」下車、25番出口より西へ徒歩2分

阪急電鉄をご利用の方

- ・ 阪急「烏丸駅」より25番出口より西へ徒歩2分

近鉄電車をご利用の方

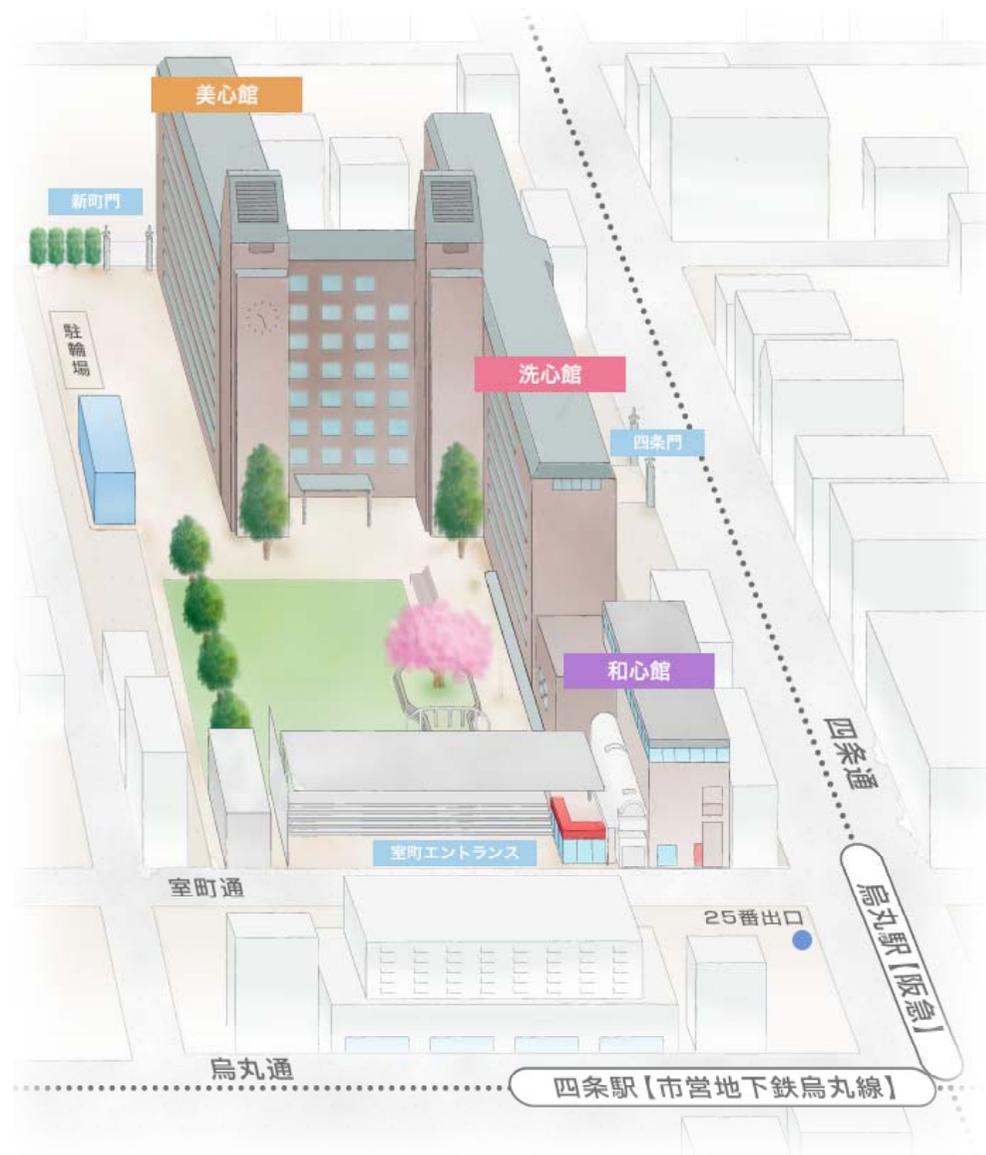
- ・ 近鉄「竹田駅」より（地下鉄乗車時間 10分）
- ・ 地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗り換え → 「四条駅」下車、25番出口より西へ徒歩2分

より詳しい経路は以下のホームページをご参照下さい。

「池坊短期大学 交通アクセス」

(<http://www.ikenobo-c.ac.jp/koutsu/>)

キャンパスマップ



仏教文学会4月例会シンポジウム 奈良時代の高僧の「伝」と「肖像」

—古代から中世へ—

発表要旨

日 時：平成28年（2017）4月29日（土）14：00～17：30

会 場：池坊短期大学 洗心館5F 52教室

共 催：平成28年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤（C）「古代寺院における「伝」と「肖像」の制作活動—長安と平城京の諸寺院間ネットワーク—」（研究代表者：藏中しのぶ、課題番号：16K02373）

日本の伝記文学の黎明は奈良時代八世紀後半であり、ひとりの人物について詳細な伝記叙述をともなう本格的な「伝」は、渡来僧の高僧伝に始まる。ことばで記された二次元の文学「伝」は、かたちある三次元の肖像彫刻「肖像」として立体的に立ち上がり、車の両輪のように両者相俟って、高僧の姿を後世に伝えるよすがとして機能した。奈良時代、八世紀に活躍した高僧の「伝」と「肖像」は、後世、平安時代の天台祖師像、鎌倉時代の法蓮上人像、興福寺南円堂の法相六祖坐像をはじめとする「肖像」彫刻へと大きく展開する。日本文学・仏教学・日本美術史学の研究者がつどい、学問領域を越えたコラボレーションによって、古代から中世への展開を視野に入れ、奈良時代の高僧の「伝」と「肖像」の諸問題を問い直す。

■英彦山中興法蓮上人の肖像について

■京都国立博物館 浅湫毅

東京・大倉集古館が所蔵する作品の中に「伝法蓮房坐像」という肖像彫刻がある。それは坐高73・7センチほどの恰幅のよい壮年の僧形像で、その写実的な作風から鎌倉時代にさかのぼるものと、かねてより考えられている。その姿は、あたかも如意輪観音かのごとく右膝を立てて坐し、右手は袖口をつかんで前方に伸ばし、そのたもとを左手で引くという、わが国の僧侶の肖像彫刻としては異例ともいえる動きのある姿勢をとっている。

その像主について、かねてより浄土宗の宗祖法然上人の筆頭弟子である法蓮房信空の像ではないかとする説もあったが、発表者の調査によって、九州・英彦山中興の祖で、八世紀前半に活躍したことが知られる伝説的な僧、法蓮上人の像であることがわかった。それに関しては、東京国立博物館が発行する『MUSEUM』659号（2015年12月発行）誌上において公表した。しかしながら、八世紀に活躍した伝説的な僧の肖像彫刻が、突然鎌倉時代に製作される理由に関しては考察がおよばなかった。

本発表では、奈良時代における法蓮の人物像、すなわち法蓮がどのような人物かと当時考えられていたかという点を再確認するとともに、同人の肖像が鎌倉時代になって製作された理由を、鎌倉時代の人々が過去の人物の肖像彫刻にもとめた機能、という視座から考察したい。

■玄昉僧正の実像・伝承とその肖像

■種智院大学 佐伯俊源

奈良時代の法相宗僧・玄昉（？～天平十八年六月）は、養老年間に入唐し、撲陽大師・智周について法相を学び、玄宗皇帝にも認められ紫衣の下賜を受けた。在唐十八年の後、天平七年（七三五）に帰朝し、『開元釈教録』所載の一切経を請来するなど、奈良仏教の発展に多大な影響を与えた人物である。帰朝後、聖武天皇の信頼も篤く、僧正に任じられ、吉備真備とともに橘諸兄政権の担い手として政治の上でも権勢を誇ったが、この栄達が逆に政僧として批判を浴びる誘因となり、藤原仲

麻呂の元で天平十七年（七三五）に筑紫観世音寺に左遷され、翌年任地で没することとなる。

このような政僧・玄昉に対して、藤原広嗣の怨霊によって殺害されたという逸話や頭塔の縁起（玄昉の首塚）など奇怪な伝承が後世に多く生み出され、悪僧・破戒僧としてのイメージが上塗りされていくことになった。しかし、仏教者・玄昉は盛唐仏教をわが国に伝え奈良仏教の礎を築いた秀でた仏門の巨匠であり、平安時代の密教紹隆の遠因も玄昉の存在と密接に関わっていたと考えられる。そのような玄昉の実像と伝承、そしてそうした評価と後世の玄昉の肖像化に関わる諸問題についても考察してみたい。

玄昉の肖像として伝えられるのは、鎌倉初期の興福寺南円堂の法相六祖坐像（康慶作、国宝）の一体が有名であるが、周知の通り、この所伝には問題がある。その他、十三～十六世紀頃に製作された法相曼荼羅などの絵画資料に所見する玄昉の姿について確認し、その教学的な法灯継承の問題についても論及してみたい。

■古代寺院における「伝」と「肖像」の制作活動—菩提僊那と鑑真—

■大東文化大学 藏中しのぶ

高僧の「伝」と「肖像」の制作が日本で最初に確認されるのは、八世紀後半、唐僧鑑真の「大和上之影」と鑑真伝三部作『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』『唐大和上東征伝』『延暦僧録』、インド僧菩提僊那の「像」とその像賛『南天竺婆羅門僧正碑并序』であり、いずれも渡来僧を対象とする。

天平八年（七三六）唐僧道璿・林邑僧仏哲と共に来朝し、当時、国内最大規模を誇った官大寺・大安寺に住した菩提僊那が大安寺で、天平勝宝五年（七五三）に来朝した鑑真が唐律招提（唐招提寺）で遷化すると、弟子たちは師のために「肖像」を造り、「伝」を述作した（『シルクロードの東と西をむすぶ—文学・歴史・宗教の交流—』を終えて—伝と肖像・鑑真和上と婆羅門僧正菩提僊那—『文学語学』218号、2016年）。

天平宝字四年（七六〇）、菩提僊那が二月二五日に遷化し、光明皇太后が六月七日に崩御する。菩提僊那が弟子たちに託した遺言「阿弥陀浄土」の造営は、同年七月二十六日に開始された光明皇太后の追善供養に吸収され、平等院鳳凰堂をさかのぼる浄土庭園、法華寺阿弥陀浄土院に結実した（『南天竺婆羅門僧正碑并序』の沈黙—菩提僊那の「阿弥陀浄土」と光明皇太后追善事業—『全国大学国語国文学会創立60周年記念論集』2017年4月刊行予定）。

天平期の宮廷仏教と菩提僊那、鑑真伝三部作を企図した鑑真の弟子の唐僧思託の活動から、古代寺院における「伝」と「肖像」の成立と制作活動の一端を浮き彫りにしたい。

■鑑真和上像再考

■同志社大学 井上一稔

唐招提寺御影堂に祀られる鑑真和上像は、和上その人の姿を写した、肖似性の高い像として捉えられるのが一般的だが、再度この像が語ることを読み取り、美術史的な位置づけを試みることから始めたい。面貌や印相、服制などは和上の特徴を示していることに異論はないが、像全体をみるとき果たして和上の忠実な再現となっているのだろうか。特にこの点を検討し、本像の写実とは何かを探る。その上で、『東征伝』の和上の死に際して影を模したという記事を読み込む。またこの記事と和上像の解釈には、小杉一雄氏の肉身像・遺灰像の研究が大きな影響を与えているが、この点に関しても再検討したい。

さらにわが国の肖像は、鑑真和上像の後に最澄・円仁・円珍の天台祖師像が現れることに言及したい。最澄・円仁に関しては同時代の肖像は伝わらないものの絵像としてその姿が捉えられ、円珍は園城寺に入滅間もないころの二軀の木彫像が伝わっている。和上に天台僧としての一面があることは周知のことだが、その姿においてもわが国の天台祖師像と禪定の姿であることが通じるのである、ここに和上像との関係性を検討する必要がある。

■パネル・ディスカッション

■司会・コーディネーター 藏中しのぶ